

[海外の動向]

## 「第9回国際語用論学会」

堀 素子

2005年7月10日から15日まで、北イタリア湖水地方の一番東にあるガルダ湖のほとりで「第9回国際語用論学会」(9th International Pragmatics Conference 以下IPrAと略す)が開催された。ガルダ湖は琵琶湖によく似た形をしているイタリア最大の湖で、ヨーロッパでは有名リゾート地ということだが日本ではコモ湖ほどは知られていない。南北に伸びているこの湖の北端まで行くのはかなりの道程で、ミラノから列車でヴェローナに行きそこで湖北へ向かう列車に乗り換え、降りた駅から今度はバスに揺られてようやく現地に到着する。およそ5、6時間はかかる。

学会が開催されたリーヴァ・デル・ガルダは、後ろにアルプスに連なるドロミテ山地、前にガルダ湖という風光明媚な場所で、湖畔には色彩豊かで個性的な品を並べた店が並び、随所にリゾート客のためのホテルがある。IPrAの参加者も彼らに混じってこれらのホテルに滞在し6日間のすばらしい経験をしたのであった。

基調講演をはじめほとんどのシンポジウム(パネル)と研究発表およびポスター展示は、卵の殻を伏せたような半円形のドーム状の国際会議場で行われた。約700人の参加者がそれほど広くない会場を動き回るので連日お祭のような賑わいであった。その上コーヒープレイクも昼食も全部同じ建物内で摂るので席を確保するのも難儀なほどであった。

基調講演ではそもそも語用論(Pragmatics)とは何かという基本的な問いに関するものが多かった。たとえばRukmini Bhaya NairはPragmatics, Pragmatism and the Postcolonial: A Philosophical Overviewで、20世紀の語用論で顕著であった“markedly linguistic and often marked by a neo-Darwinian social ethic”の批判の上に、21世紀は“inter-cultural norms”を定義する理論の構築が求められると述べた。またBoby CarstonはPragmatic Inference—Reflective of Reflexive?で、Griceのconversational implicatureと他の2つの理論をRelevance Theoryの視点から見直すことを提案した。一方、Marina SbisaはHow to Read Austinと題して彼の初期の著書*How to Do Things with Words*を再評価し、語用論の基礎に置くべきであると主張した。この他、新しい視点としてCharles GoodwinのMulti-modal Action in Discourseと、Wolfgang IheringのComputational Pragmatics for Ambient Intelligenceがあげられる。特に前者は、会話をビデオ録画するこ

とによって発話時に沈黙している聞き手の行動を含めた多重的分析が可能になるとした。

パネルは数も多く同時進行が多かったので全部に出ることはできなかったが、トピックのいくつかを紹介しよう。語用論、言語表現、異文化間コミュニケーション、ポライトネス、第二言語習得、関連性理論、認知理論などは複数のパネルが出されていた。他に子供・市民・高齢者・病人など対象を特化したものや、基調講演でも取上げられたマルティ・モダリティ理論やコンピュータ使用による分析など新しいものもあった。特定の言語に限定したものの中に日本語に関するものが2点、日本語を含めた異文化間コミュニケーションを論じたものは私どものパネルを含めて2点あった。研究発表 (lecture) やポスター展示 (poster) にも興味深いものが数多くあったが、ここで紹介できないのは残念である。

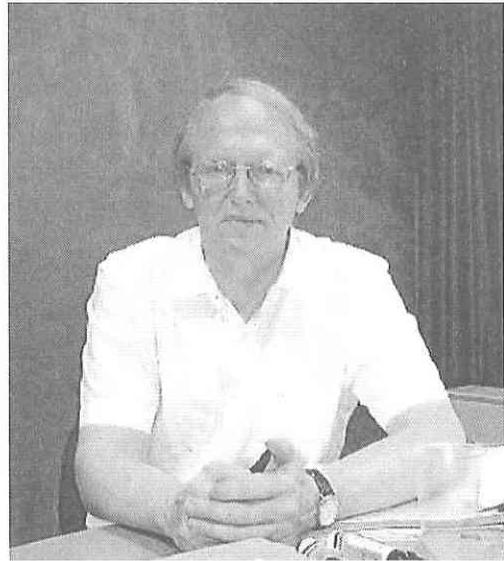
ここで最後の日の第1と第2のロットに割り当てられた私どものパネルについて簡単に報告させていただく。しかしそのまえにその前日の懇親会の報告をしよう。懇親会場はロベレートという学会会場からバスで1時間以上離れた村にある。なぜわざわざそこまでIPrAのメンバーを全員連れて行ったのかという理由は“Maria Dolens”と名づけられた鐘にある。この鐘は第1次大戦の終焉を記念して各国から寄せられた大砲を材料にして1924年に铸造されたもので、それ以来今でも「平和の鐘」として毎晩100回鳴らされる。われわれはその鐘の音を聞いたのち、平和を祈りながら食事をしたのであった。

さて Discursual Problems in Cross-Cultural Conversation と題した私どものパネルはこの懇親会の翌朝であったので参加者は少ないのではないかと心配していたが、部屋がいっぱいになるほど多くの人々が来てくださり好意的なコメントや今後の研究への示唆をたくさん頂戴した。パネルの内容が言語そのものよりも会話の運び方・聞き手の態度などコミュニケーション・スタイルの日英比較に近かったことが逆に参加者の興味を惹き、基調講演でも触れられたように multi-modal 的なアプローチがいま求められていることを痛感した。

ポライトネス関係で特筆したいのは Gabriele Kasper の Politeness in Interaction と題したパネルで、現在ポライトネス理論の中核をなす研究者がパネリストとして発表したため、会場は押すな押すなの盛況であった。特に face をポライトネスとの関係でいま一度見直す Robert Arundale、ポライトネスを behaviour に見ようとする Richard Watts & Miriam Locher、ウェブ上での face の侵害についての Andrea Golato & Carmen Taleghani-Nikazm などの論文は、これからのポライトネス研究に大きな示唆となるであろう。

最後にこの学会の Secretary General (事務局長) である Dr. Jef Verschueren に直接インタビューしたのでその様子を報告しよう。IPrA は1985年に第1回大会がイタリアで開かれて以来2、3年ごとに世界各地で大会を開いている。日本ではすでに1993年に神戸で開催したが、今のところ開催地がヨーロッパに集中しているのが実状で、できればいろいろな国で開催したい事務局長としては少し残念ということらしい。現在の会員は約1000名でそのうち日本人は180名ほどいる。米国とカナダを合わせて250名であることを思えばこれは大き

い。日本の語用論学会に希望することは、  
という質問に Dr. Verschueren は即座に  
こう言われた。「ヨーロッパはレトリッ  
クなど理論に傾きがちなので、日本は日  
本でしかやれないプラグマティックスを  
目指してほしい。ヨーロッパ以外の視  
点・アプローチは大変重要でありがた  
い」と。(右の Dr. Jef Verschueren の  
写真については同氏より掲載許可取得済  
み。)



Dr. Jef Verschueren